

「水から学ぶ：京都湧水探検隊」

総合地球環境学研究所教授

秋 道 智 彌 委員

(第5回会議 平成18年7月21日)



今日は、「水から学ぶ」という私たちがやっていることをもう少し教育委員会の中で活かすようなリンクをできないかということで、考えたことをお話ししたいと思います。

活動と計画

- 第3回世界水フォーラム@メキシコシティに参加(平成18年3月)。

セッションを共同組織。Water cannot be traded as sacred water.

- 連携塾の開講(平成18年秋より6回研修。毎月1回土曜日午後。

新島会館にて午後2時～4時

- 「水と文明」シンポジウム(平成19年2月24日神田一ツ橋講堂)(案)

乾燥地と湿潤地における文明と水との関わりを考える。

基調講演:石澤良昭(上智大学長)

パネリスト:五味文彦(機構理事)・安田喜憲(日文研)・佐藤洋一郎(地球研)・

渡辺千香子(大阪学院短大)ほか

この3月にメキシコシティで開催されました第4回「世界水フォーラム」でユネスコと共同開催ということで、「水と文化多様性」というセッションを運営いたしまして、「聖なる水」を一つのメッセージとしてこの会議の場で伝えて、4,000部くらいのパンフレットを配布しました。なぜ、「聖なる水」なのかと言うと、いま現在ですね、例えば日本が1,000tのトウモロコシをアメリカから輸入するとします。そのトウモロコシ1,000tがどのくらいの水を使って作られたものであるかという風に換算してやると、アメリカから「仮想の水」バーチャル・ウォーターと申しますが、大量の水を輸入することになる。食料に換算しても食の動きはすごいですし、第一、世界中の水のバランスはものすごく悪いんですよ。みなさんご存知のように洪水が世界各地で起こっている。大雨ですね。ところが、他方、中国の黄河流域なんかは工業、農業用に水を使いすぎて、黄河の水がなくなった。海に川の水が流れない現象が起こっています。一体このアンバランスがどうやって起こってきたのか。じゃあ今後どうするかというような水をめぐる問題は、21世紀の地球上の大問題であると言われています。私たちはそういった水のアンバランスに関する問題も重要だけれども、人間の文化にとっての聖なる水とかの重要性を、京都とかアジアの例を元に話を出しました。

それから、今度、プロジェクトとして考えておりますのは、平成19年の2月24日、東京

神田の一ツ橋講堂で、「水と文明」というシンポジウムを開きます。いま「人間文化研究機構」の理事をされています五味文彦さん，総合地球環境学研究所の佐藤洋一郎さん，上智大学長で東南アジアの世界遺産であるアンコールワットの調査をされている石澤良昭さんなどをお招きして，水と文明の大きなシンポジウムを考えている。

また，こういうようなことだけでなく，「人と水の連携塾」を開講します。これは，京都周辺から講師に来ていただいて，6回連続で京都の丸太町通寺町上ルの同志社の新島会館で市民を対象として毎月講義をします。これは要するに市民の方がたとのリンクです。80人ほどを予定しております。そこでどんな話を展開するかという点では，みなさんから是非ともアイデアなりを頂戴できれば嬉しいです。

「人と水」塾・開講



地球研、民博、日文研、歴博、国文研の講師陣による「人と水」の歴史・文化・環境・食などに関する塾を今秋9月より月1回（土）の予定で開講します。講義を中心とした楽しい会を目指します。

お問い合わせ先：
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4
総合地球環境学研究所
「人と水」塾係
事務局・西まで
電話：075-707-2417
FAX:075-707-2509
E-mail:m-nishi@chikyu.ac.jp

ポイントは，京都の湧水を考えよう，ということです。湧水言うまでもなく地下水ですよ。私は烏丸丸太町で育ちました。小学校の頃，家の中に井戸があった。で，家にお風呂がなかったので近くの銭湯に行っておりましたが，井戸水は冷たくって本当に気持ちよかったですね。そういう井戸はいま現在どうなってるんだろうかと考えます。

京都の湧水

- 生活用水 家内の井戸
- 伝統産業 麴(麴師:麴屋町)、豆腐(宇治豆腐、祇園豆腐、南禅寺湯豆腐)、清酒、友禅染め
- 京の文化 茶道、華道
- 産業・工業用水 サントリー
- 神社 上賀茂神社、松尾大社(酒徳の神)、貴船神社、御香宮神社
- 寺院 泉涌寺、勧修寺の氷室ノ池
- 庭園 神泉苑、渉成園
- 京都御苑・二条城

それから京都の伝統産業である例えば生麴作り。麴屋町というのがございますけれども、江戸時代から麴屋町があった。それからお豆腐。宇治豆腐。祇園豆腐。南禅寺の湯豆腐。それから清酒。伏見の清酒。それから友禅染。つまり京都の伝統産業で水は非常に重要な資源であり、それを利用してやってきたわけですが、それがいまどうなっているのか。地下水はどうなっているのか。はっきり言って不足しているのではないか。地下水のデータは京都市の水道局にあるのかどうか。とくに大型の店舗等々が地下水をどのくらい位汲み上げているということを調査しておかないと地盤沈下とかいろんな問題が起こります。それから汚染の問題がありますのでこれをグループでやりたい。それからもちろんお茶とかお花などの世界では、京都が非常に有名でありますけれども、水は非常に重要です。それから水と産業、工業との関係ではもういろんな会社がありますので、いちいち名前はだせませんが、例えば大山崎の水の問題ではサントリーさんがかなりいろんな事業をやっておられます。そういう企業をまきこんで水の問題を考えるプロジェクトが京都でできないか。それから、これもみなさんよくご存知の上賀茂神社、お酒の神さんをお祭りしている松尾大社、それから貴船神社も水の神さんを祭っています。南のほうに行きますと桃山の御香宮神社では、水は古代から重要なものとして扱われてきた。ここの湧水を汲みに来る人も多い。

それから言うまでもありませんが、寺院にいきますと、例えば泉涌寺、それから勧修寺なんかいきますと、古代にはですね、そこで

冬場に池に凍った氷を氷室として、宮中に献上した氷室の池が残っている。こういうふう

に、京都には水との関わりが非常に古くからある場所が多い。もちろん、庭園で神泉苑、

きれいですよね。それから、渉成園、これは枳殻邸ですよ。あと京都御苑、二条城。京



梨木神社

京都の湧水を探検する

1. 総合学習での取り組み

地域の分布と変遷

世代間の対話・伝統産業の認識・水需要の変化

2. 生涯学習における取り組み

京都の名水探訪(分布マップ)

神聖な水・由来記(編集)

物語のなかの水(講座)

3. 水を媒介とした観光戦略

水の名所(歴史で構成・安全安心・森と温暖化防止)

食と酒(日本酒・ビール・ウイスキー)

京都・水物語(単行本の出版へ)



都は水の問題を考える上では全国一のいろんな材料を歴史的に持っております。地域では、日本の名水等々ございますけれど、京都には絶対負けるんですね。この強みを利用しない手はないということになります。

さあ、そこで最後ですが、「湧水探検隊を組織しよう」と、これは掛け声だけですが、ひとつは、総合学習でできないか。つまり、地域の中で小学校の学校というと、その学区の中で湧水をどう使ってきたかというのを、おじいちゃん、おばあちゃんに孫の世代が聞いてみる。こうした対話を通じて、湧水の利用が家庭内でどうなってきたんか、あるいはさっき申しました、様々な伝統産業がございますので、そういったことを聞いていただければ考えるわけです。私は京都中の豆腐屋さんを調べたいと思っています。その豆腐の水はどうなってきましたか、という話ですね。で、私が下京区のある豆腐屋さんで「おっちゃんこの豆腐の水どうしてんの」と聞いたら、「地下水に決まってるやろ」と、「しかしな、最近は減ってきて、何で減ってきたかというたら、某百貨店とか某スーパーできたんで、お前らなんとかしてくれんのか」と言われて、いや、どうもわからんけれども、この湧水はみんなのええ豆腐を作るための湧水なんだということを言われました。そういった町の人の声をですね、いろんな形で反映するような学習を、地元の方、それから地元の伝統産業に携わってきた方々と、小学区レベルごとにできないだろうか。で、京都は100 m 以上北と南の落差もありますので、湧水の出る場所のずいぶん分布が異なっております。そういった「湧水の探検隊」をですね、組織してはどうかと。ただこれは小学校を中心としたあるいは中学校レベルの総合学習的な取り組みだけではなく、生涯学習としてもできる。そこにありますような京都の名水マップ。分布マップを作る。それから神聖な水とか水の由来記。これはもうグルグル歩き回るしかないんですけども、あるいは、物語の中の水。源氏物語で水がどう扱われているかということも重要で、これは私たちのグループの中の国文学研究資料館の仲間がやっております。そういったことを含めて、京都の水についての情報を集め人びとの間に浸透していったら、生涯学習の長いシリーズ物にならないだろうか、と考えたわけです。

それから3番目は観光戦略。京都には年間4,700万人の方が観光で来られる。それを5,000万人にしたいという話をこの前京都駅の飲み屋で、観光関係の仕事をやっている方とお話してですね、先生、あと300万人やりましょうな。というお話をしております。その関連で水の名所めぐりみたいなものが将来できないか。京都議定書があったように、森と水と温暖化みたいな話をくっつけてですね、現代的な話題ともくっつけるような水の名所めぐりができないか。それから、伏見の清酒、サントリー、それからいろんなお豆腐とか生麴とかいれて、そこで食べていただいて、観光と衣・食・酒みたいなものをドッキングさせて京都の水を体験して頂くようなことができないのか。

そして最後に、井上満郎先生あたりに編者になっていただいて「京都水物語」というような本を誰か書くとか、ナントカ殺人事件とかね（笑）。京都は水が一番清いから、昔からずっと伝統ございますので、水で京都を探検して教育あるいは京都をよく知るということで、できないだろうかということ。「人と水塾」というプロジェクトを去年から始め

●人間文化研究機構

総合地球環境学研究所・国際日本文化研究センター・国立民族学博物館・国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館

●連携研究「人と水」5年計画で平成15年度から開始

●水と人間のかかわりを歴史・文化・民俗・生態・環境・文明などの観点から総合的に検討

●日本では、京都と東京に注目

●海外では、メコン河、ガンジス河

て、私は考えております。まあ、なんらかの形でリンクを作って具体的な取り組みにできればいい。で、最終的には一番の大きな意味は文部科学省の検定教科書に記載されるような話がだせればよい。水をめぐる京都の話が出たら修学旅行で来る人も、その場所を回ることにつながる。若い人が京都の新しい面を探検する。ですから、京都の水をめぐる話が文科省の教科書に出るような形で、なにか新しい発見、あるいはなんというか、契機を、若い人に知っていけるようなことができればいいなと考えているところでございます。

この辺で私のスピーチを終わらせていただきます。ありがとうございました。